

趣味を仕事にしたら 別の趣味がでさちやった

慶川 絹さん(32歳)／占いの玉手箱
YOKIKAWA SUKUNO

宅建の資格を持つ不動産会社の〇だった慶川絹さんは、今から4年半前に「好きなことしかしたくない」と思っただけで会社を辞めた。その時の好きなことが「占い」。現在、慶川さんは、名古屋・東京や活躍する「占いの玉手箱」の売れっ子占い師として、常設コーナーやイベント会場を担当するほか、講演や原稿の執筆など忙しい日々を送っている。

「自分で見れば タダ」が副業に

慶川さんが占いに出会ったのは、22歳のころ。仕事や当時の状況に悩んでいた時、友人の「占いで見てもいいから」のひと言だった。「それまで占いなんて全然興味なかったけど、それがすっごく当たったんです。以来ちよこちよこ利用するようになったのだから。そして書店でたまたまタロットの本を見つけて自分でも占いを始めることに。「自分で見ればタダですよ(笑)。そのうち友だちを見たりするようになったんです」。わからないことを「占いの玉手箱」で教えを乞いながら実力をつけていく。

会社の休みの日にはイベント会場で占いをするようになった慶川さん。「初め



て見ず知らずの人を占った時は心臓がキドキ空。ものすごい真剣でした。タダで見るとは全然違っ。荷が重く緊張の連続だった」というのが半年前のことだ。すでに、宅建の資格取得の際も自分で自分の担当の仕事に関して細かいエピソードを聞くことになり興味深いことがあり、「占いは当たるから面白い。自分でもなりたいのか」と思

MJスペシャル

けどそうなんです」と笑う。

不動産関係の仕事が好きになれなかった慶川さんは、占いのサイドビジネスを始めて半年後、その道一本にしようことを決意。喫茶店の一角を借りて店を出したり、「占いの玉手箱」に所属して仕事を持った。「最初はとても生活できなくて、これは予定と違う、って思った空交。空いた時間のアルバイトで生活の保障を確保し、そのころ私はタロットだけだったので、相手人相、生命判断、西洋占星術、易经など、ほかの占いの勉強を始めました。

占いは情報。責任 を感じます

「占いの玉手箱」の社員となって丸4年。すっかり売れっ子占い師に成長した



彼女いわく、「占い」というのは、あくまでも情報だと私は考えるんです。占いを仕事にしてからは、常にフレキシブルや責任を感じてる。例えばタロットなら出たカードの読み取り方が肝心。より正確に情報を読み取るためにその勉強が必要なんです。一歩踏み込んだらもうのびのび。広い分野にわたる世界。シマッター、って今でも思っていますよ(笑)。でも好きなことだから仕事になるってはないですね。

この仕事でやっていけるという自信がもてたのは約3年前。話も調も占い師の実績が伝わってくる。体ひとつでできる半面、高価な専門書などお金や時間の自己投資が大きいというこの仕事。「落ち込んだ人相見た人が占った後、輝いて見えたり、霧が晴れて個性を見出しちゃったり、占いに来良かったと感じてもらえるのが何よりありがたい。」

「趣味を仕事にしたら、別の趣味がでさちやった」と笑う慶川さんの今の趣味は乗馬だ。オーストラリアにまで出かけるほどで、そのために英会話の勉強も始めてしまった。「好き」が仕事になり別の趣味を持ちながら、好きな仕事を追及する。理想のライフスタイルが慶川さんの中に見える。